

資料 1 生活のひとこまから

★ハツさん（大正11年生）

平成21年夏、麦の家に入居して2週間後の親戚あてハガキ。

「…このたび、私は病院から役場の命に従って、中川村の麦の家という所に移動させられました…みな、頭の毛が白く、菌もない様な老人ばかりと暮らす事となりましたのでお知らせいたします。年をとって自分の家に居られないと言う事、わ悲しいことです。『さんざ』働いて年がよってからこんな所へくるなんて夢にも思いませんでした。年とりたくないけれど仕方ないことです。ひとりベッドでラジオを聞いております…」

☆想像力を豊かにしてハガキを読み、ケアを考える

◎村から移動を「命じられてきた」と考えるような入居過程であったこと。インテイクはどうであったのか。自宅から病院、そこから麦の家へ、転々と。◎「髪の毛が白く歯もない」・老人とはドンドン自分の持っているものを喪失していく

◎年を取って自分の家にいられないのは悲しい。「寂しい」のではなく「悲しい」

◎「こんな所に来るなんて」―怒り？に対してどのように接するのか。

アタッチメント…言葉ではなく手を握る、など。

◎「一人ベッドでラジオ」を聞いて気を紛らわせているのか？

◎本当の人の貧しさとは、人から見捨てられること（マザーテレサ）

★ハツさんの入居後1か月の親戚あてハガキ

「…とよさんという、小柄で静かな方と食堂で一緒に食事を頂きました。95歳というおばあさんも元気でありました。一段と高い住み家（ホスピス棟）には寝たきりの老人が幾人もいます。人は年をとって人の世話を受けなければならぬのですね。又あへる日をたのしみにしましょうね…」

☆グループホームに入居することはクライアントにとって、自分の家、家族、故郷からの分離・喪失体験となる、同時に苦しみ、忍耐、我慢が英知を生み出す機会ともなる。とよさんという友達ができ、新しい環境への関心も生まれる。発想の転換により入居者にとって麦の家が、自分の居場所になるような「場」づくりがケアの目指すところとなる。

◎自分の親の入居後、悩みや悔やみを抱え、我慢していることを推察することのできる家族への支援、負い目を少なくするような支援も考えなければならぬ。

◎何よりも、入居2週間、さらに2週間を経る中で、ハガキに表現されるハツさんの変容。世話を受けねばならない自己を受容していく、楽しみさえ生みだす力をもつ。「人は死の瞬間まで成熟に向かう」（E・H・エリクソン）存在者である。

★とみ子さん（昭和2年生）ブドウの木1共同棟

90歳を前にして2週間の入院の後、ようやく麦の家に帰る。こちんまりとした共同棟に女性常連メンバー4人とワーカー2名が揃う。とみさんが情けないような表情で「あした、死ぬ」。退院して10日、もう毎日、低い、ぼそぼそとした声で訴えが始まる。保健師としての経歴を持つとよさんが「もう病氣は治って退院したのだから、少しずつ良くなっていくよ」とハアハアと持病からくる息苦しさを整えながら声をかける。ハツさんが「年をとりやあ誰かがいつかは迎えが来るに」としっかりと口調で語りかける。「大丈夫、頑張つて」と若いワーカー。そしてまた、とみさんの「あした、死ぬ」の順番が回ってくる。根気よく、毎日、何回も、会話がくりかえされる。

ある日、ワーカーはいつも、口を真一文字に閉じ、黙って聞く、という態度で集団の輪に入っている、天理教の先生であるみさえさんに助け船を頼んだ。「ねえ、とみさんが、毎日、毎日『あした、死ぬ』っていうけど、どうしたらいい？」みさえさんはボンとテーブルをたたき、背筋を伸ばし、毅然と、ひとこと。「ぐたぐた言わんでも、死ぬときは死ぬー」。あつけないとられた一同。続けて一言。「今日は生きとる」とみさえさん。

みんなは「そうだ、今日は、生きとる」と急に、テーブルは活気づく。会話は「死ぬ」に加え、「今日は、生きとる」のフレーズが加わる。その数日後、さらに、とみ子さんの「あしたは、死なん」が付け加

わった。グループホームの、日常の集団ケアのなかで、生きてある今の楽しさと、死について語りあう。

★とし子さん（明治43年生）とワーカーの会話。居室にて。

「わたし、だんだん、仏様になるの、たくさんの人が並んでいて、後ろからつくのよ」
「つつかれたら、お先にどうぞ、つて言つてよね」「アハハハ」

★宮子さん（大正8年生）ぶどうの木Ⅲ（ホスピス棟）ホール

10時のおやつに、うす化粧で皆が集まるホールに登場。ほほ紅と薄紅色の口元。「あら、宮子さん、きれい、おめかしして、どうしたの」とみな口々に。

少し照れて、口元に手をあてながら「ふふ、そろそろ、お迎えも近いから、きれいにしていないと仏様さまに失礼ですよ」

「老いゆくこと」を通して、「死」への思いに「耐える」英知とユーモアを獲得していくのか。

★どうにもならない あや子さん（昭和15年生）居室にて

思ったようにならん、現実きびしい。一生懸命したつて、なるようになると思えん。

からだ動かんようになったら…、でもこういうところにおれば…。こんなにかえても、どうにもならんことはなら